

◆ 基礎情報

計画名	鳥取県西伯郡南部町と栃木県さくら市喜連川での取組を通じた地域資源活用とリーダーシップ教育の実践
実施責任者	建築・デザイン学部 建築・デザイン学科 高橋 大輔
対象者	建築・デザイン学部 建築・デザイン学科 ゼミナール学生 12名
実施期間	2025年4月～2026年1月

◆ 取組み概要

この取組みは、地域固有の資源である「竹」や「木材」の循環的活用を通じた持続可能な地域振興と、学生の建築設計・施工スキルの習得、およびリーダーシップの育成を多層的に組み合わせた実践的教育プログラムです。

南部町においては2020年度より継続している地域課題解決の取組を基盤としています。2023年度に完成した「えん処明神谷」の改修プロジェクトや、2024年度の地域住民参加型ワークショップの成功を経て、本年度は「竹」の利活用という新たな社会課題に焦点を当て、萩生田ゼミと合同で行いました。一方、喜連川においては、産官学連携（共立女子大学・東京電機大学・北海学園大学・熊谷組・住友林業・栃木県・さくら市）による強固な協力体制のもと、地域資源の有効活用を目指しています。これら2つのフィールドにおいて、学生は単なる「設計者」にとどまらず、行政・企業・住民といった多様なステークホルダー間の意見調整やプロジェクトマネジメントを主導する役割を担います。実社会の複雑な課題に対し、自ら問いを立て、具体的な建築的解決策を提案・実行するプロセスを通じて、実社会で求められる「共立リーダーシップ」の体現と、建築家としての専門性の統合を図ることを最大の目的としています。

◆ 取組み全体の流れ

導入・目標設定（4月）：履修者確定後、リーダーシップ教材を用いて最終的な目標設定と共有を実施しました。あわせてルーブリックの確認を行い、評価軸を明確化しました。

現地調査・オンライン協議（4月～5月）：喜連川での現地調査やオンライン会議、南部町とのオンライン会議を複数回実施し、地域課題の深掘りとスケジュールの合意形成を図りました。

設計提案・中間講評（6月～7月）：各チームが具体的な制作物の提案を行い、学内の授業見学会や、熊谷組等の企業を交えた「3大学講評会」でのプレゼンテーションを通じて、外部からのフィードバックを反映させました。

材料発注・施工準備（7月後半～8月）：モックアップ制作による構造検証を行い、現地木材加工工場との資材加工打合せや制作スケジュールの最終調整を行いました。

制作合宿（9月）：南部町では竹の植生場所のフィールドワークを行い、職人の指導の下で実験的な制作を行い、喜連川では3大学合同で木材を活用した家具スケールの建築を現地で設計・施工しました。

振り返り・成果報告（10月～1月）：プロジェクトの全行程を振り返り、報告書や報告用動画の作成を通じて、学びの可視化と次年度への教材化を進めました。

◆ 取組みの成果

- ・地域資源の価値創造：南部町では放置竹林等の課題に対する具体的な利活用モデルを提示し、喜連川では地元産木材の新たな可能性を建築作品として具現化しました。

- ・学生の質的成長：企画から施工、他者との交渉までを一貫して担うことで、課題解決型思考と、チームを牽引する主体性が顕著に向上しました。

- ・成果物の創出：現地に設置された建築作品に加え、喜連川では活動のプロセスを記録した報告動画を作成、南部町では新聞やテレビといったメディアへの出演、報告会動画の作成など、次年度の学習教材としての資産を蓄積しました。

喜連川活動記録： <https://www.youtube.com/watch?v=JKtG4nfnA-g>

◆ リーダーシップ教育に関する実践

共立リーダーシップの意識づけ、目標設定の活動	年度当初に教材を配布し、学生個々人が「率先垂範・相互支援・包容力」といった共立リーダーシップの定義を理解した上で、自身の役割に基づいた目標設定を行いました。本プロジェクトは複数の地域を同時並行で進めるため、目標の形骸化を防ぐ工夫として、毎週のゼミにおいて週ごとの目標を設定するスタイルを導入しました。現場の状況変化に合わせて毎週目標を微調整し、着実に積み重ねていくプロセスを通じて、リーダーシップを日々の合意形成に不可欠な実践的スキルとして定着させました。
協働活動	南部町と喜連川の各チームは、行政、民間企業（熊谷組、住友林業等）、他大学といった多角的なステークホルダーと連携しました。学生たちは単なる作業者ではなく、プロジェクトの進行管理や他者との意見調整を主導する役割を担いました。特に三大学合同での設計・施工プロセスでは、異なる専門分野のメンバーと目的を共有し、限られた工期内で地域資源を建築へと昇華させる「実社会の縮図」のような環境下で、しっかりとした協働を実践しました。
共立リーダーシップの観点での振り返り	「振り返り疲れ」を回避するため、デジタルツールを活用した対話型の振り返りを中心に行いました。毎週の協議内容を議事録として記録し、自らの言動を客観視できる体制を構築しました。また、熊谷組や構造設計者をはじめとする外部の専門家を招いた講評会後に相互評価を実施し、他者からの指摘をどう改善に繋げるかを議論しました。教材のループリックを定期的に参照することで、自身の行動がチームの調和や目標達成にどう寄与したかを、事実に基づいて内省する習慣を身につけました。

◆ 学生の成長に関する総括

当初は教員や企業の指示を仰ぐ、言われたことをそのまま受け入れるなど、受動的な姿勢も見られましたが、プロジェクトが進行し、現場での予期せぬトラブル（資材調達の遅延や天候による工程変更等）に直面する中で、学生たちの主体性は劇的に変化しました。自発的にゼミ時間外のミーティングを重ね、役割分担を再構築するなど、「目標達成のために今何が必要か」を逆算して行動する力が養われました。これは、教材を通じた意識づけと、実際のハードな協働活動が有機的に結びついた成果であると確信しています。最終的には、全員がチームの調和を保ちながらも、個々の専門性を発揮してプロジェクトを完遂するという、高いレベルの「共立リーダーシップ」を体現するまでに成長しました。

◆ 取組みを通じた全体の所感

外部専門家や他大学の学生と接することで生じる「適度な緊張感」は、リーダーシップを育む絶好の触媒となりました。特に、熊谷組や住友林業等のプロフェッショナルによる講評会を通じて、学生は企業レベルの実践的な工程管理や振り返り手法を体験し、「形ある成果」の裏側にあるチーム運営や合意形成の重要性を実体験として痛感していました。また、構造や環境といった専門外の教員から講評を受ける機会を設けたことで、プロジェクトを社会的な文脈で捉え直し、思考の停滞を打破する大きな収穫がありました。こうした多様な意見の集約や困難な調整という実社会の縮図のような環境こそが、「率先垂範・相互支援・包容力」という資質を磨く場となったはずです。多大な調整労力を要しましたが、それに見合う飛躍的な学生の成長と地域貢献を達成できたことは、本GPの理念を象徴する意義深い成果です。

◆ 今後の展開

本年度蓄積した振り返りの記録や学生自らが制作した報告動画は、次年度の学生にとって非常に有効な学習教材となります。このリーダーシップ教育のサイクルをゼミの伝統として定着させ、自治体や企業との継続的な連携をさらに深めることで、地域課題解決と学生の成長を両立させるプログラムとして、さらなる発展を目指します。